



天井が高くすっきりとまとめられた受付。足腰の弱い方もスムーズに移動できるように常に患者さんの目線で動線づくりをしている。



体外衝撃波疼痛治療器  
「ドルニエ エイボス ウルトラ」



栗整形外科病院のみなさま。若い職員さんの生き生きと発言する様子が印象的だった。

## 愛

媛県の東端に位置する四国中央市。製紙、紙加工工業が盛んな紙のまちとして知られるこの地に、栗整形外科病院はある。リウマチや骨粗鬆症の治療を専門とし、介護施設など8つのグループを運営する、地域医療を支える病院だ。同院を17年前に継いだ武内院長は、「患者さんの層が変わりましたね」と、全国に数台の事例しかない体外衝撃波疼痛治療器の導入を振り返った。手術をせずに精度の高い治療ができるとあり、県外からや現役アスリートの来院も増えたという。こうした最新機器導入の背景には、患者さんに納得のいく治療をしたいという思いと、もう一つ、若い職員の育成という視点がある。介護に力を入れながら、最新医療も取り入れ、治療の幅を広げる。患者層が過度に変化する中で、現場はルーチンワークに

加え応用が必要となる。その刺激が職員モチベーションを高め、質の高い医療への循環を生む。院長は常に10年後、自分がどうなっているか？世の中はどう変わっているか？を見据え、若い職員が主体となって現場を支えてほしいと考えているのだ。

今年に入って新しくはじめた取り組みがある。院内研究会だ。部署ごとに6つのグループに分かれ、取り組みを発表し議論し合うというもの。これは骨折予防チームの懇親会で、職員から「グループ毎に発表会をやりませんか!!」という提案がきっかけだった。いざはじめてみると、医師の立場からは見えていなかった色んな目線が見えてきた。例えば、動画を用いた転倒予防指導士グループの転倒事例に関する発表には「すごいインパクトがあった」と思われ刺激をもらったそう。こうして

現場の取り組みを共有しあうことが、再発の防止にもつながる。院長の頭の中になんとなくあったアイデアが、いざ職員の実行力に背中を押されて形になった研究会。ゆくゆくは市民公開講座のようなものができるのではないかな」と、手応えを感じたようだ。

「自分一人では何もできない」と院長は口にする。わからないことや変えたいと思ったことは、些細なことでも問いかける。一人じゃ何もできない、だからこそ自分と同じ意識を持って、現場に立つてほしい。「今日も言われたなあ」と院長が嬉しそうに教えてくれたのは、「理学療法士さんに元気をもらってるから、先生の診察はいらんです」という、リハビリに通う患者さんとの笑い話。そんな何気ない日常の風景が、地域を支える栗整形外科病院の未来を象徴していた。

Idea for Healing space | vol.16

一人でできることは  
限られているから、  
考え、共に知恵を出す。



武内 啓 院長  
経歴

- 1991年 愛媛大学 医学部卒業
- 1991年 愛媛大学 医学部整形外科入局
- 1992年 新居浜十全総合病院 勤務
- 1995年 済生会西条病院 勤務
- 1998年 栗整形外科病院 勤務